BOOK X — 見えざる戦争

第09章 — システムの外側

01 — 下層地区への道

医療協会から坂を下った最初の交差点で、レイチェルが信号が変わるのを待っていると、雨が降り始めた。霧雨に近かったが、道路の向こう側の明かりが実際よりも遠くにあるように見えた。

行政地区から下っていくにつれて、街並みがこれほど急速に変わることを忘れていた。オフィスの窓は商店の窓に取って代わられた。公共スクリーンは少なくなり、軒下に立つ人々は互いに顔見知りのようだった。

横断歩道で、彼女は二人の子供を連れた男を先に通すために足を止めた。子供の一人は紙に包まれた何かを抱えていた。紙がほどけかけると、もう一人が手を伸ばして押さえた。

レイチェルは自分の鞄に目を落とした。病院でエイドリアンと取り組んだ研究に関するものは、ほとんど入っていなかった。記録の保管責任を明らかにする声明書はセラ・ミンの手元にある。次の段階の調査を始めるための資料は、エイドリアンとイマニが保管していた。

数日ぶりに、研究の行く末を背負わずにどこかへ行くことができるのだった。

病院に入る以前に自分たちを助けてくれた人々が、まだそこにいるかどうかは分からなかった。給水の仕組みも、住む部屋を失った人々への対応も変わっていた。公表された変更もあれば、現地に着かなければ分からない変更もあるだろう。

彼女のそばにバスが停まった。フロントガラスの上には下層地区よりも先の行き先が表示されていた。運転手は扉を開け、待っていた人々に、表示どおりの経路で終点までは行けないと告げた。

「どこまで行くんですか？」とレイチェルは尋ねた。

運転手は彼女の知っている道路の名を挙げた。

彼女は乗り込んだ。

車内には六人いた。前方のスクリーンに変更後の運行についての説明が表示され、その下には自治体当局への協力を求める通知が現れた。説明が消えた後も、通知は画面に残った。

年配の乗客が、朝のバスは運行するのかと運転手に尋ねた。

「道路を使わせてもらえればね」と運転手は答えた。

乗客にはそれで十分だったらしい。再び窓の外に目を向けた。

レイチェルはロイに行き先を伝えられなかった。二人とも自分の存在について説明を求められなかった場所を思い出してほしい、と頼んだだけだった。ロイが思い浮かべるかもしれない場所はいくつかある。二人の記憶が同じ場所へ導いてくれる保証はなかった。

ミンに会う手配を頼むことも考えた。だがそのためには、少なくともどちらか一人が、連絡の取れる既知の場所にとどまっていなければならない。二人ともそれを約束できなかった。

機械に他人の居場所を尋ねることができなかった時代に、人々がしていた方法で進むしかなかった。

バスは運転手が告げた道路よりもかなり手前で停まった。運転手は謝り、これ以上進まないよう指示されたのだと言った。レイチェルは他の乗客とともに歩道へ降りた。

通りの先では、バリケードのそばに自治体の車両が二台停まっていた。その先へ行きたい人々は横断歩道へ誘導されていた。いつまでこの措置が続くのかを示すものはなかった。

レイチェルは雨を避けるために襟を立て、商店の方へ歩いた。

ほぼ同じ時刻、街の反対側でロイはひさしの下に立っていた。頭上には細い隙間があり、不規則な間隔で水滴が落ちていた。足元には小さな水たまりができていた。

リアン医師が勧めるよりも長い時間、歩き続けていた。もう、右腕の重みで苦痛を感じずに済む姿勢が見つからなかった。立ち止まらずに進めるかとしばらく考えていたが、今ではもう同じ問いを繰り返す意味はないと分かっていた。

低いコンクリートの壁に腰を下ろし、ポケットから医師の書き付けを取り出した。診察の詳細が普通の紙に書かれていることに、どこか安心を覚えた。他の人に見せるのに、まず自分に閲覧する権利があると証明する必要がなかったからだ。

リアンが入院できるよう手配を試みた施設の住所は、そこにはなかった。診断施設を出るまでに、病床の確保は確認されていなかった。

彼は紙をしまった。

背後の店から女性が出てきて、歩道に置かれた容器を店内に運び始めた。ロイを見ると、片づけが終わるまで中に入っているかと尋ねた。

数分だけでもありがたい、とロイは答えた。

女性は店に戻り、扉を開けたままにした。

彼は慎重に立ち上がった。周囲の通りには馴染みがなかったが、坂の下の方にある建物には見覚えのある特徴があった。そこまで行けば、以前の給水所への道を知っている人に会えるかもしれないと思った。

レイチェルも同じ場所を思い浮かべたかどうかは分からない。

少なくとも、そこへ行こうと試みられるだけの時間は、生き延びてきたのだ。

02 — 調査の裏側

診断施設では、検査区域が閉まって間もなく、自治体の係官が管理責任者との話を終えた。係官には診療記録を調べる権限はなかった。民間からの紹介患者について照会する場合の手続きを、説明してもらうことだけが許されていた。

管理責任者は施設の法務部門の住所を教えた。

「その人物が診察を受けたのかどうか、ここで教えてもらえる方はいませんか？」

「あなたに何を尋ねる権限があるのか分からない限り、いません」

係官は膝の上の書類に目を落とした。二つの施設間の通信についての参照情報が与えられていた。夕方には二つ目の連絡があり、捜索対象の人物はもうその住所にいない可能性が示されていた。いずれの書類にも、本人確認が済んだ身元情報はなかった。

係官は管理責任者から教えられた住所を書き留めた。

建物の別の場所では、医師が診察記録を書き終えようとしていた。リアンが手配した検査の記録を、他の検査と同じ方法で保管することに同意していた。それらだけを別に扱うよう求める指示はなかった。この状態を維持することが重要だと彼は考えていた。

リアンは帰る前に受付へ戻ってきた。患者の受け入れを検討していた病院から返事があったかと尋ねた。

まだなかった。

彼女は翌朝連絡の取れる番号を医師に伝えた。ロイが再び来院したら、診察の手配をするつもりだと言った。

「別の診療所の番号を渡してもいいのでは」と医師は提案した。

「彼は私の番号を持っています」

医師は理解した。すでに検査を受けた患者に、自分のことを何も知らない医師のもとで最初からやり直させる医学的理由はなかった。

リアンが建物から出ると、係官は車内で報告書を作成していた。彼女は駅へ向かう途中で車のそばを通った。彼は声をかけなかった。

二十分後、報告書が司令部に届いた。

デレンは添付写真を見る前に報告書を読んだ。写真は日中に撮影された診断施設の入り口だった。階段付近に鞄を持った男が写っていた。誰もその男がロイ・バッティだとは言っていない。

それでも人物が写っているだけで、写真は扉ではなく人間についての情報を含んでいるように見えた。

デレンは写真を閉じた。

連絡将校に、対象者がいたと確認できる目撃情報は得られたのかと尋ねた。将校は、自治体による照会では確定できなかったと答えた。通信当局に追加情報を求めているところだった。

「情報が届いたときには、もういなくなっていたら？」

将校は、以前の所在であっても関心の対象になると答えた。

デレンも同意した。彼が明らかにしたいのは、現在の措置が過去の出来事に関する情報を得ることを目的としているのか、それとも現在の居場所へ要員を派遣することを目的としているのか、ということだった。当初の計画では二つの目的は区別されていた。しかし、彼の机に届く要請では、その区別が次第に難しくなっていた。

午後に提出された住所一覧を開いた。その一つはM-06が診察を受けた民間の診療所だった。彼女の受診に関する情報がファイルに追記されていたが、その関連性についてデレンが送った意見書は付いていなかった。

彼は意見書を添付するよう求めた。

「その住所はもう一方の照会には今も関係があります」と連絡将校は言った。

「ならば住所は残しておけ。彼女に関する部分に私の意見書を添付してくれ」

将校は必要な変更を加えた。

数分後、ヴェイル大佐の執務室から新たな指示が届いた。民間当局から確認が得られた場合に作戦を実施できるよう、地域施設の要員を待機させること。確認が得られるまでは、指定要員に関する追加の照会を事務部門に回すこと。

デレンは、医学的な問題と作戦上の問題の間に設けようとしてきた区別が、別々の二部門に引き継がれても維持されるのかと考えた。

彼はM-08について、現在の医学的評価の提出を求めた。

回答には、当該要員はすでに伝達された条件のもとで投入可能であると記されていた。より新しい評価を作成中だという。

病院での作戦の数時間前、ロイについてもほぼ同じ文を読んでいた。そのときはロイを医療機関から移送できる条件についての文だった。要員が彼のところへ到達する頃には、その条件は変化していた。

デレンは窓辺へ行った。眼下では指揮車両の明かりが点き始めていた。

机に戻り、要員が投入可能であること自体は、投入の理由にはならないと書いた。そして、今後発令されるいかなる命令にも、確認を要するという指示を残すよう求めた。

とりたてて珍しい一文ではなかった。だが、また同じことを書くことになるだろうと彼は思った。

03 — 失われた項目

エイドリアンは最後の職員が帰宅する前に事務室を出るつもりだった。ところがイマニが見つけた彼は、何枚かの紙を机に広げ、それぞれの記載内容が存在していたと確認できる日付の順に並べていた。

紙は原本ではなかった。目録の一部を写したもので、その傍らに、移管記録の参照情報と、ある程度の確信をもって特定できた装置の説明を書き込んでいた。

イマニは机の空いている隅にカップを二つ置いた。

「何か新しいことは？」

「もっと早く気づくべきだったことがある」

彼は別々の資料群に保管されている一連の観測について、二つの記述を見せた。最初のものには観測に用いられた装置についての参照情報があった。二つ目にもそれは残っていたが、分類上の位置づけが変わっていた。

医師は二つの記述を読んだ。

「別の観測系列なの？」

「そうは思わない。参照番号を見てくれ」

番号は同じだった。記述が短縮されたときにも変更されていなかった。装置についての参照情報も変わっていない。異なっていたのは、資料が分類された項目の見出しだけだった。

エイドリアンは三枚目の紙を見せた。そこには、より新しい資料群から写した一連の見出しがあった。資料は運用期間の限界に関する項目に収められていた。

「それでは誰がどれほど生きたのかは分からないわ」とイマニは言った。

「ああ。ただ、誰かがこの観測結果を別の種類の記録に含めるべきだと考えたことは分かる」

彼女はカップを置いた。

軍務を管轄する当局が一連の測定結果に関心を抱く理由はいくつもある。身体が特定の任務を遂行できる期間を確実に見積もることも、その一つだった。その期間を短縮し得る要因を把握することも、また一つだった。

どちらの場合も、その身体が、予定された任務の最終日を過ぎても生きたいと願うかもしれない人間のものであると、研究者が考える必要はなかった。

エイドリアンはノートを取り出した。百年計画の初期資料と、ロイの治療中に生じた疑問との比較を書き留めていたものだった。彼は二つの問いを書いたページを開いた。

修復の終わりを決めるものは何か。

許可された生命の終わりを決めるものは何か。

二つの問いを別々の行に書いたのは、答えが同じかどうか分からなかったからだった。

「仮に、前者を延ばすことができると、すでに彼らが確認していたとしたら」と彼は言った。

イマニは彼を見た。

「それでも、実際に延ばしたという証明にはならないわ」

「分かっている」

しばらく二人とも口を開かなかった。レプリカントに課された六年という寿命制限は、かつてはそれが避けられないものであるかのような言葉で正当化されていた。その後、人工生命の条件を決定する権限を持つ人々の判断が、その制限の設定に関与していたことを突き止めることができた。しかし、それらの決定が生物学的にどのような結果をもたらしたか、全体について信頼できる説明はまだ得られていなかった。

軍事的例外の存在は、それらの疑問を解決するものではなかった。ただ、その答えに価値を見いだしたかもしれない別の集団の存在を示していた。

イマニは、運用期間の起算日が記録に含まれているかと尋ねた。

なかった。エイドリアンは、そのような日付を記載した可能性のある文書を探すと言った。分類の変更については別に書き留めた。

「観測結果そのものを請求できないかしら」と彼女は言った。

「請求はできる」

それがどれほど難しいか、彼はずっと考えていた。現在の保管責任者は移管の経緯を説明できても、資料を開示する意思も権限もないかもしれない。また、ある機関が参照情報だけを引き継ぎ、その参照先の資料は引き継いでいない可能性もある。

観測結果が当初の形のまま残っていると考える根拠は、まだなかった。

彼は残存する記録から確認できる事項を簡潔な声明書にまとめた。軍事用レプリカントにより長い寿命が与えられたという主張は含めなかった。調査対象の手法を使えばロイにも長い寿命を与えられる、という主張も含めなかった。

イマニはそれを読み、当初の分類と後の分類は、必ずしも研究の目的を示すものではないと明記する一文を加えるよう提案した。

彼はその一文を加えた。

二人は書類とともに保管してもらうため、声明書をミンに送った。法律事務所から受領の自動通知が届いた。実験に関わるものを送るときにはレイチェルの意見を待つのが習慣となっていたエイドリアンは、受信者一覧に彼女の名を探している自分に気づいた。

そこにはもうなかった。

午後以降、彼女から何か連絡があったかとイマニに尋ねた。

「記録の手配が済んだということだけよ」

エイドリアンは再び二つのカップを見た。次にレイチェルと話すときには、もっと確かなことを伝えたいと思っていた。今のところ伝えられるのは、彼女が問う価値があると考えた疑問が、少しだけ明確になったということだけだった。

それだけでも伝える機会があることを、彼は願った。

04 — 今も残る部屋

以前の給水所は、もう夜間には使われていなかった。入り口には鎖が張られ、利用時間を知らせる掲示の下に、夕方の給水はより大きな施設へ移されたという通知があった。

レイチェルは雨の中に立ち、その住所を読んだ。坂をさらに下ったところで、かつて医療支援を待つ人々を見かけた建物がいくつも並んでいる道路だった。

彼女は最初に見覚えのある建物へ向かった。

入り口の上の照明が変わっていた。扉は塗り直され、中で行われる活動を示す看板も新しくなっていた。入り口脇のベンチは以前と同じで、片側には壊れた支柱を誰かが補修した金属片が取り付けられていた。

ベンチに座っていた女性は、夕方の給水を担当していた人たちは帰宅したとレイチェルに告げた。レイチェルは、病院が患者を受け入れ始める前に行われていた手配について、覚えている人を探していると説明した。

「どんな手配ですか？」

「他の人たちと一緒に移動できない人のための部屋です。ときには付き添いの人も見つけてくれました」

女性は考えた。そのような手配は以前の給水所に隣接する建物で、時々行われていたという。夕方の給水が廃止された後も、そこにとどまることは許されていた。今も誰かいるかどうかは分からないと答えた。

レイチェルは礼を言い、建物の脇を回る道を進んだ。

下の階の窓の一つに明かりが見えた。

扉を開けたのは中年の男だった。かなり古いシャツの上にもう一枚シャツを着ていて、上のシャツのボタンが合わない部分から、下のシャツがのぞいていた。彼の背後は、壁に沿って椅子がいくつも並べられた部屋だった。

レイチェルは、滞在する場所が必要な人々を今も支援している人がいるかと尋ねた。

「時々ね。あまり場所がないんだ」と彼は答えた。

彼女は人を探しに来たと言った。治療が必要な男が、以前ここで受けた支援を思い出して訪ねてくるかもしれないと説明した。負傷の詳細には触れなかった。

男は伝言を残すかと尋ねた。

彼女は室内を見た。掲示板にはいくつかのサービスの利用時間が書かれていた。電話番号の一つには取り消し線が引かれ、その下に誰かが鉛筆で説明を書き加えていた。

「ここで待ってもいいですか？」

雨を避けて入ってきた他の人たちと一緒に待つのでよければ、隣の部屋に椅子がある、と男は言った。

彼女は男に続いて中に入った。

他には三人しかいなかった。一人は眠っていた。別の一人は両足の間にビニール袋を置き、窓を横切っていく車の明かりを眺めていた。子供が古い通知の裏に何か絵を描いている傍らで、父親は手紙を読んでいた。

レイチェルは窓のそばに座った。

協会に残って、記録を調べられている人々を通じてロイの情報を得ようとしながら夜を過ごすこともできた。借りていた部屋に戻り、届かないかもしれない連絡を待つこともできた。

ここなら彼に会えるという保証が増すわけではない。この場所の利点は、彼が来れば、会うための予約は必要ないということだけだった。

中に入れてくれた男が水の入ったカップを持ってきた。レイチェルは礼を言い、この部屋は一晩中開いているのかと尋ねた。

「ここを見ている人がいる限りはね」

男は扉の近くの机に座って、その晩洗い終えたカップを数え始めた。数を紙に記した。

レイチェルはその様子を見ていた。何かを数えるという行為の中には、それを提供される人々の人生についての説明まで求めないものが、まだ残っているように思えた。

彼女はゆっくり水を飲んだ。

部屋の反対側では、子供が絵を描き終えた。父親はそれを丁寧に折りたたみ、手紙と一緒に封筒に入れた。

外では雨脚が強まっていた。

05 — 要請書に記された人物

地域施設で、M-06はこれまで一度も出頭を求められたことのない事務室へ行くよう指示された。指定要員が普段説明を受ける部屋と同じ階にあったが、室外には現在の指示を確認できる表示装置がなかった。

彼女を迎えた職員は、民間での診察を求める彼女の要請に対して発行された受領証の写しを持っていた。

その要請を自分で行ったのか、確認を求められた。

彼女はそうだと答えた。

次に職員は、作戦に関連する何らかの目的で要請したのかと尋ねた。

「いいえ」

職員は書き留めた。相談を受けた医師とは、許可された外出時間が始まる前から面識があったのかと尋ねた。

自治体の一覧でその医師を見つけた、と彼女は答えた。それ以前に話したことはなかった。

職員は用紙の二ページ目を開いた。そこにある質問のいくつかは、民間当局に開示できない指示のもとで行動する要員への手配に関するものだった。どの質問をするよう求められているのか、判断に苦しんでいるようだった。

「診察の許可は得ていましたか？」とようやく彼は尋ねた。

彼女は、要請が検討された際に告げられた内容を説明した。職員は一定時間、施設を離れることを許可した。独立した診察を求めた要請の受領証には、診察が禁止されたことを示す記載はなかった。

「診察を受けたのですか？」

「医師に相談しました」

職員は、任務遂行能力について医師から所見を得たのかと尋ねた。

「そういうことは尋ねませんでした」

職員は顔を上げた。一瞬、本当にその答えに関心を抱いたようだった。

「何を尋ねたのですか？」

事務室に向かう途中、彼女はこの質問について考えていた。医師は、他人が期待する行動を取らなかったときのことを彼女が語った際、何を意味しているのか考えるよう促していた。目の前に用紙を置いた職員がいるというだけで、その話し合いの内容を説明しなければならないとは思わなかった。

「医療上の相談です」と彼女は言った。

職員はそれ以上追及しなかった。相談の性質は確認されていないと記入し、この件は医療部門で検討しなければならないと告げた。

彼女は、彼が記載した内容を閲覧することは許されるのかと尋ねた。

職員は驚いた様子だった。

「私についてのことですから」と彼女は言った。

職員は、その文書が部門内の調査の一部をなすものだと説明した。文書で言及されている本人に写しを渡せるかどうかは分からないという。

彼女は調べてほしいと頼んだ。

事務室を出ると、廊下の突き当たりの窓のそばでM-04が待っていた。彼女は、自分の診察が性質を確認できていない活動として記載されたと彼に話した。

「必ずしも悪いことではない」と彼は言った。

その意味は彼女にも分かった。職員は、彼女が何か悪いことをしたとは書かなかった。しかし一つの照会がまた自分の行為の説明を求められる機会を生み出すのなら、そうした調査が終わるのを待ちながら一生を過ごすことにもなりかねなかった。

「彼らは私よりも調査について知っている。でも、医師のところへ行ったのは私なのに」と彼女は言った。

M-04は窓の外を見た。柵の向こうには道路があり、車両の明かりが双方向にゆっくりと流れていた。

その晩は待機するよう求められたと、彼は告げた。彼女にも同じ指示が出ていたかどうかは知らなかった。

彼女にも出ていた。

司令部が彼女を投入する必要があると確認したら、どうするつもりなのかと彼は尋ねた。

「何をするよう求められているのか、確かめる」

彼はかすかに笑った。訓練の最初期なら、二人のどちらからも期待された答えだった。今では当時とまったく同じ意味にはならなかった。

彼女はポケットから医師のカードを取り出し、裏返した。裏には次回の診察日を記入できる欄があった。次回の予約は取っていなかった。

「もう一度、あそこへ行きたい」と彼女は言った。

M-04は、もう一度要請すればいいと提案した。

「そうする。でも、彼らが行かせないと決めたときにも、それが要請であり続けるのか、知りたい」

彼にはその問いに答えられなかった。

階下のどこかで扉が開く音がした。廊下の端に職員が現れ、識別番号でM-04を呼んだ。

彼は何の用か確かめに行った。

M-06は窓辺に残った。民間診療所の待合室で見た人々を思い出した。それぞれ違う理由でそこへ来ていた。医師に何ができるのか分からないまま来た人もいた。しかし、そうした不確かさを理由に、受け入れられる前に自分の有用性を証明するよう求められる患者はいなかった。

診療所ですべての疑問に答えが見つかったわけではない。

それらを尋ねられる場所があると分かっただけで、十分だった。

06 — 名前のいらない再会

九時少し前、一台の車が建物の外に停まった。レイチェルは窓越しにエンジン音を聞いて立ち上がった。男が車の後部から二つの袋を扉まで運んできた。彼女を中へ入れてくれた男が手伝いに出ていった。

彼女は再び腰を下ろした。

街のさまざまな場所からロイがこの地区にたどり着くまでに必要な時間を計算し始めていた。無意味な計算だった。どこで検査を受けたのか、どのくらい歩けるのか、交通機関を利用することが許されたのかも知らなかった。ただ、電話で話したとき疲れているように聞こえたことだけは分かっていた。

男が袋の一つを持って戻った。物資は別の部屋に届ける予定だったが、今では受け取る人がいなくなったのだという。何品か片づけるのを手伝ってくれないかと彼女に頼んだ。

彼女は男のいる机へ行った。食品の包みと清潔な毛布が何枚かあった。男は毛布の保管場所を教えた。彼女がそれを隣の部屋へ運ぶと、子供は父親の肩にもたれて眠っていた。

机に戻ると、扉がまた開いていた。

戸口に立っていた男は、持っている鞄の中で荷物が片側に寄ったかのように、わずかに身体を傾けていた。コートは濡れ、額の上の髪は雨で色が濃くなっていた。扉のところにいる相手に、何かを説明しようとしていた。

男がこちらを向くより先に、レイチェルにはその声が聞こえた。

彼女は立ち尽くした。

ロイは物資を受け取っていた男の肩越しに彼女を見た。一瞬、見間違えたかと思った。彼女の伝言を見つけることは想像していた。彼女は先に来ていたのだろうか、それとも翌日来るのだろうかと考えながら一晩を過ごすことも想像していた。ほんの数歩先に彼女が立っているとは思わなかった。

彼女は部屋を横切った。

彼女が抱きしめるまでのわずかな間に、彼はその名前を呼んだ。彼の身体がこわばったのを感じて、彼女はすぐに腕の力を緩めた。彼の左腕が彼女の肩を包んだ。

「ごめんなさい」と彼女は言った。

「謝らなくていい」

彼の姿が見えるところまで少し離れた。襟の下には、病院で見た覚えのない小さな痕があった。コートは右側と左側で垂れ方が違っていた。

「ここに来てくれたのね」

「君も来た」

彼女は笑った。今度は、笑う彼女の顔を彼は見ることができた。その晩初めて、電話から聞こえる音を手掛かりに想像する必要のないことが起きたのだった。

扉のそばの男は、彼女が待っていたのはこの人かと尋ねた。

彼女はそうだと答えた。

男はうなずき、車のところへ戻った。伝言を残すことにしていたら掲示板にどんな名前を書くべきだったのか、彼女に尋ねることはなかった。

ロイは机のそばに座った。レイチェルは積まれた毛布から一枚を取り、彼のそばへ置いた。尋ねたいことが山ほどあった。最初に聞いたのは、食事をしたかどうかだった。

「少しは」

「いつ？」

彼は思い出そうとした。彼女は首を振り、扉のそばの男のところへ行って、食べ物があるか尋ねた。男は今届いたばかりの包みを示した。

二人は机を囲んで食事をした。しばらく、ほとんど言葉を交わさなかった。眠る場所を待つ人々がいる部屋では、互いに説明できないこともあった。説明する必要のないこともあった。

やがてレイチェルは、検査の後で再び医師に会ったかと尋ねた。

会っていないと、ロイは答えた。リアンの書いた紙を彼女に渡した。彼が食事を終える間、レイチェルはそれを読んだ。隣にいる人々から文字が見えないよう、紙を広げすぎないようにした。

「これを診てくれる人を探さなくちゃ」

「ああ」

「でも、今夜はだめ。どうせまた十キロも歩くつもりならね」

彼は笑った。

彼女は彼と議論する覚悟をしていた。その笑顔を見て、言おうとしていたことを彼はもう受け入れていたのだと気づいた。

「ここにいられるなら、今夜はどこへも行かない」と彼は言った。

一瞬、彼女は答えられなかった。

彼は彼女の椅子のそばの鞄を見て、必要なものはすべてあるかと尋ねた。彼女は記録のこと、ミンとの手配、観測の経緯を明らかにしようとするエイドリアンの取り組みについて話した。何かの唯一の現存する写しを持ち出すことなく、二人とも街を離れられるようになったと伝えた。

「それでも研究を続けられるのか？」

「ここでは無理。この鞄の中にあるものだけでもね。でも、すべてを見つけ直すところから始めなくて済む」

彼はしばらく黙っていた。

「以前よりも前進したな」

彼女はリアンの書き付けを彼のポケットに戻した。

部屋の世話をする男が、隣の建物で一晩過ごせる場所を提供できると言った。空いているベッドは一台だけだが、床に敷けるマットレスが何枚かあるという。

レイチェルは礼を言った。ロイは、何かお返しにできることはないかと尋ねた。

男は彼の腕を見た。

「ベッドを今ある場所から動かさなければいい。昨晩、誰かが反対の壁際に動かそうとして脚を一本折ったんだ」

ロイはそうすると約束した。

07 — 不在という状況

司令部では、要員の投入を検討する根拠となっている評価が再び改訂された。診断施設での民間当局による照会では、対象者がそこにいたことを確認できなかった。通信当局からも、調査対象の会話の当事者の一人が彼だったとする報告書は届いていなかった。

デレンは、新たな評価が先ほど読んだものとどう違うのか尋ねた。

連絡将校は、協会と施設は今や同じ一連の出来事の一部とみなされていると説明した。したがって対象者が施設にいた可能性は、その一連の出来事が確認される以前よりも高いと判断されていた。

「彼がそこにいた可能性だな」とデレンは言った。

将校は同意した。

「今もそこにいるということではない」

将校は再び同意した。

デレンは評価書の写しをヴェイルのもとへ持っていった。大佐は上層地区の外で対象者を確保することについての勧告を読んでいた。当初指定された期間を超えて要員を待機させるよう、要請が出ていた。

ヴェイルは、その晩に行われた照会についてデレンが説明するのを聞いていた。

「何が残っている？」と彼は尋ねた。

対象者が支援を求めた場所についての情報が得られる可能性は、まだあるとデレンは説明した。その情報が現在の居場所を特定するうえでどれほど役に立つかは、事前には判断できなかった。

ヴェイルは確保命令に目を落とした。撤回されてはいなかった。作戦を指揮する当局も、それを撤回する意向を何ら示してはいなかった。

「作戦の中止を勧告しているのか？」

「これらの住所を確認済みの所在と呼ぶのをやめるよう、勧告しているのです」

大佐は命令書を置いた。

デレンは、すでにいくつかの民間施設が照会の影響を受けていると言った。ロイが支援を必要とする度合いが減っていると考える医学的な理由はなかった。司令部が、ある人物が診察を受けたという事実を、その診察場所にまで作戦を拡大する理由として扱い続ければ、彼が支援を受けるのはますます難しくなる。そしてどこで支援を受けたかを確認することも、より難しくなるのだ。

ヴェイルは机の脇のスクリーンに目を向けた。そこには作戦に参加する部門の関係図が表示されていた。部門同士をつなぐ線のいくつかは、確保命令が最初に発令されたときには存在していなかった。

「勧告は上に送ろう」

デレンにはその意味が分かった。その晩も要員を待機させ続けるのかと尋ねた。

ヴェイルは待機を続けると答えた。ただし、現在の評価に基づいて診断施設へ要員を投入してはならないとのことだった。

デレンは自分の執務室に戻り、指示を記録した。それが命令の撤回とは異なることを、確実に記録に明記した。

地域施設では、その晩が終わるまでにM-08がもう一度評価を受けるよう求められていた。求められた動作はすべて完了できたが、いくつかの動作は維持できる時間が短くなっていた。

談話室に戻ると、M-06が扉の近くの机に座っていた。

彼女は検査がどうだったかと尋ねた。

「投入可能だ」と彼は言った。

彼女は待った。

彼は負傷した手を見た。その手を使用するよう求められる際の条件について、職員から指示を受けたと話した。

「まだ痛むの？」

彼にはその問いが、自分が話していたこととは無関係に思えたようだった。

それから、痛むと答えた。

彼女はうなずいた。彼は彼女の向かいに座った。

数分間、二人は部屋の反対側のスクリーンでニュースを見ていた。街の一部で通常のサービスを再開するために講じられた措置が説明された。発表では、そのサービスがどのような状況で中断されたかには触れていなかった。利用できなかった人々についても言及されなかった。

M-08は、その晩また作戦があると思うかと尋ねた。

「分からない」

彼は扉に目をやった。

彼女は、もしまた評価を受けるよう求められたら、手がまだ痛むことを医師に伝えるつもりなのかと尋ねた。

「彼らは知っている」

「知っているかどうかを聞いたんじゃない」

彼は彼女を見た。次の発表がスクリーンに現れるほど長い間、その問いについて考えた。

「もう一度伝えてもいいと思う」

二人はニュースが終わるまで、机のそばにとどまった。

08 — システムの外側

隣の建物のベッドは、二本の木片で修理されていた。ロイが腰を下ろすと、マットレスの端と端で高さが違うのが分かった。男の指示を思い出し、ベッドを動かそうとはしなかった。

レイチェルはベッドのそばへ椅子を運んだ。窓際の小さな机にランプがあり、彼女は彼の腕に光が当たるよう向きを変えた。その下の損傷した組織を診ようとすることはなく、コートと腕を支える包帯を整えるのを手伝った。

椅子で眠るつもりなのかとロイは尋ねた。

「下にマットレスがあるわ。一枚持ってくる」

彼は床を見た。特に清潔な床というわけではなかった。代わりに自分がマットレスを使おうと申し出た。

「ロイ、どちらにベッドが必要かはもう分かっているでしょう」

彼は反論しなかった。

彼女はしばらく腰を下ろした。ランプの光の中で、病院を出てから彼の顔がどれほど変わったかが分かった。電話で彼の声を聞いていたときには気づけなかった、小さな疲労の兆候があった。

「別れてから、何があったの？」と彼女は尋ねた。

彼は指定要員との遭遇について話した。自分を拘束しようとしなかった女と、大きな代償を払いながら、その前進を阻んだ男について語った。検査について話すときには、自分が理解した範囲でその結論を伝えた。負傷した腕がどうなるか分かっているとは言わなかった。

彼女は口を挟まずに聞いていた。彼の話した出来事のいくつかは想像していた。それ以外は思いもよらなかった。

「彼女はあなたを連れていけたの？」と、話が終わると彼女は尋ねた。

「試みることはできただろう」

「でも、しなかった」

「ああ」

以前の路面電車の停留所の近くに立っていたM-06を思い出した。彼女は、彼がするのを観察した動作と、それに対応して行うよう教えられた動作の違いに関心を抱いていた。あの出会いの後、彼女がどうなったかは知らなかった。

レイチェルは軍事的例外について話した。確認できたことと、エイドリアンが推測していることを慎重に区別した。ロイは、指定要員が自分たちの寿命をどれほどと見込んでいるかを示すものが記録にあるのか知りたがった。

ない、と彼女は答えた。

「彼ら自身は知っているのか？」と彼は尋ねた。

彼女は彼を見た。

「分からない」

かつて二人は、長く生きられる可能性を考えの中心に置くことができた。まだ答えの見つからない問いにすぎなかったとしても、それは並外れた可能性だった。今では、翌日をどこで過ごすかさえ自分で決めることを許されないかもしれない人々について考えずに、百年という時間を考えることは難しかった。

ロイは、朝になったらどうすべきだと思うかと彼女に尋ねた。

二人は、確保作戦が最も活発な地区を離れる可能性について話した。他の場所には治療を提供できる人々がいるかもしれない。そこで研究も再開できるかどうかは、レイチェルには分からなかった。行き先を決める前に、彼の身体がどのような旅に耐えられるかを、ある程度知る必要があるという点で意見が一致した。

「街を出ただけで、彼らの手が届かなくなるわけじゃない」と彼は言った。

「分かっている」

彼女は協会にある記録と、彼のポケットの紙に住所が書かれているリアンのことを考えた。二人を助けた人々が皆、政府が二人の所在を突き止めようとしている制度や機関から離れたわけで

はなかった。その場にとどまり、自分たちに行う権利があると信じることを続けた人々もいた。

もしそうした人々が皆、自由であるためには制度の内側にいる誰とも関わらないことが唯一の方法だと判断していたら、二人は再会できなかったかもしれない。

ロイは彼女とともに窓辺へ行った。屋根の向こうには上層地区の建物の明かりが見えた。その上の雲が下から照らされていた。都市の境界や政府の権限の終わりを示す線は、どこにも見えなかった。

「昔は、彼らの手が届かない場所がどこかにあると思っていた」と彼は言った。

レイチェルは明かりを見つめた。

「あなたはそこまで行けたの？」

彼は考えて、微笑んだ。

「そこが難しいところだった」

彼女は彼の左前腕にそっと手を添えた。

朝になれば、また別の照会が行われるだろう。二人の捜索の根拠となっている承認は、消えていなかった。人工生命に別の寿命を与える可能性についても、医学的な結論は出ていなかった。二人を安全にする治療法も例外措置も、見つかってはいなかった。

二人は互いを見つけた。

その夜に限っては、誰かに確認を求めることなく、二人だけで確かめられることだった。

ランプを消す前に、レイチェルはロイの手が届く机の上に医師の書き付けを置いた。鞄は椅子のそばの床に置いた。階下では、部屋を提供してくれた男が雨を防ぐために扉を閉めていた。

ロイは鍵の回る音を聞いた。

しばらく耳を澄ませた。それからベッドに横になり、目を閉じた。

扉に鍵をかける音を聞けば、眠れなくなっていた時期があった。

今夜は違った。

第09章 終。